

# 特集にあたって

高 木 裕

2009年に、人文学部「〈声〉とテキスト論」プロジェクトの共催で、二つの催し物が開催された。同時に、二つとも、平成21年度学系基幹研究プロジェクト「声と身体に関する比較総合的研究」との共催でもある。一つは、10月に開催された、トウバ共和国から来たホーメイ歌唱グループによるコンサート「Tubaからの風のおくりもの」である。もう一つは、12月に開催された「金時鐘の新潟：記憶と声」である。私たちの「〈声〉とテキスト論」プロジェクトでは、テキストと〈声〉、文字表記と〈声〉との関連を追究する研究が多いが、今回は、「いま・ここで」の〈声〉と真正面から相対峙し、身体表現という視点で〈声〉を考察する機会に恵まれた。

前者のコンサートにおいては、ホーメイと呼ばれる「喉歌」を美しい民族衣装に身を包んだ女性たちが披露してくれた。会場で配布された資料を読むと、ホーメイとは「もともと声に含まれている倍音の高音部を声帯の力で意識的に強調させて口笛に似た音を出し、舌や口腔を微妙に動かして美しい倍音を紡ぎ出す」ところから生まれてくるものらしい。まず何よりも、〈声〉が声である前に、口蓋のみならず、口腔全体の身体器官の鳴動であるということに驚かされた。ロラン・バルトは声の〈きめ〉とは、「歌う声の中の、書く手の中の、演奏する肢体の中の〈身体〉である」と述べている。〈きめ〉と訳した *le grain* は、元来は、穀粒のことであり、つぶつぶで、ざらつきのある感触を示すが、ホーメイはその意味で、最も身体的な〈声〉であり、「声のきめ」を実体験させてくれる。さらに、ホーメイの喉=歌は、〈喉〉がまずは身体という楽器であり、音色を奏するものであり、まさに「演奏する身体」であるということを知ることができるだけでなく、同時にそこから聞こえてくる〈声〉は、紛れもなく、歌の〈声〉でもあるということを感じさせてくれる。〈声〉は独特の抑揚とリズムを

つけながら、その鳴動とともに、聴衆の身体の奥深く入り込み、その脳裏の内に、トッパの広大な大地と自然を現出させてくれるのである。近代の歌のように、歌がはじめにあり、〈声〉が歌のことばにみずからをあずけ、歌う主体の情感をのせてゆくのではない。ここには、始原の〈声〉がまずは堂々とあり、身体、感性、情念が一つになった〈声〉がそのエネルギーをことばにあずけてゆくのである。

12月には、北朝鮮への「帰国船」事業を描いた詩集『新潟』で知られる金時鐘の朗読を聴いた。詩のテキストから私が予感した〈声〉とは異なり、金時鐘の朗読の〈声〉は、情念を押さえ、むしろ淡々と語り聴かせるものであった。朗読する〈声〉の中で、過去と現在との距離を縮め、詩人は、記憶の中の〈永遠の現在〉といまなお対峙しているようだ。過去を語るときの朗読の〈声〉の訥々とした声音が、むしろはっきりと語り尽くせないもどかしさ、「啞蟬のいかり」「遠くで干からびている叫び」を伝えてくる。テキストを黙読する場合、語る〈声〉が読者の「私」を誘引し、読み手が語りの〈声〉に同化しやすいように創り上げられている場合は多い。朗読によっては、そのような意図で聴衆の情感を高め、聴衆と一体となろうとするものもある。しかし、金時鐘の朗読は、われわれが彼のテキストから聴き取る、記憶に語りかけるさまざまな〈声〉をいったんはみずからの内に掬い上げるとともに、それを彼自身の内部で敢然と一つにまとめ、聴衆の心の内にその硬質な抒情を鮮烈に刻みつけるのである。朗読という身体表現は、詩人の身体の奥底から突き上げてくる何ものかに身を委ね、〈声〉を発する行為であるかもしれない。

さて、今回の「プロジェクト特集」は、3つの論文から構成されている。〈声〉がラジオという媒体の中で意図的に創り上げられたときの問題を鈴木正美氏の論文「1920-30年代ソ連のラジオにおける「声」——スターリン体制下のジャズと大衆歌謡」は論じている。ラジオから多く流れたのは軽音楽であり、それと共に人気が高かったのがミュージカル映画の主題歌だった。これらの歌の声とメッセージはスターリン時代の国民意識を形成し、スターリン崇拜を促した。論文では、革命前夜から第2次世界大戦期に至るソ連の大衆歌謡と全体主義体制との関係について考察している。

村上吉男氏の論文「ヴェーユ身体論〔補V〕（ディドロやカントとの比較）」は、シモーヌ・ヴェーユの「あの世界」に向けた〈声〉に焦点を当てようとしている。ヴェーユの感受性は、この世界の必然性の現象としての「世界の美」と「不幸」に触れるために運動し、身体から魂へと伝達され、さらに「あの世界（超自然的な領域）」に参入する必然性をもって、神の〈声〉とすると主張する。

鈴木孝庸氏の論文「當道の『妙音講縁起——解題と翻字・影印』」は、『妙音講縁起』という當道の盲人の平家語りの始まりと賀茂・熊野の神々とのつながりを記した文書を紹介し、他の當道資料との関連について考察したものである。